



福島県

熊本 優子さん(室原)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉
取材日：9月16日

後ろを振り向かず、今を精一杯生きたい



▲小・中学校の同級生だった熊本優子さんと一重さんご夫妻。山登りも一緒に。

40数年間、ショッピングセンター「サンプラザ」に勤めてきた熊本さん。町の多くの方が顔なじみでした。現在は、福島県伊達市の新築の家で、ご主人の一重さんと明るく元気に暮らしています。店のお客様だった皆さんが元気でいらっしゃるかと、気遣っていました。

◆ふさぎ込んでいた3年間
震災の日は、お店にいました。ガラスが壊れ、棚が倒れる中、お客様を安全な駐車場に誘導しました。その時は、原発のことは、全く頭にありませんでした。そして次の日から避難生活が始まり、親戚を頼って本宮、猪苗代、浦和、矢板、那須と移り住みました。
夫婦二人とも59歳だったので、定年後は室原で農家民宿に取り組みようと準備していた矢先のことでした。そこが帰還困難区域となってしまう、手入れのできないまま家が朽ちていきます。私たちの気持ちも落ち込み、何

かをする意欲も無くなり、そのうち二人とも体調を崩してしまいました。主人は腰痛が悪化し、私も大病を患いました。
◆ここで生きていく
幸い、今では薬を飲むのも忘れるほどに元気になりましたが、健康を害してみても、生きることの大切さを痛感しました。
さらに気持ちが切り替わったのは、昨年11月に、伊達市に新しく家を構えてからです。ここで生きていくと覚悟したら、浪江のことも吹っ切れました。これからの人生を、楽しく悔いなく過ごそうと思うようになったのです。

若い頃から大好きだったスポーツやドライブ旅行などを、再び始めようという元気が湧いてきました。まずは健康づくりと、夫婦二人でスポーツジムに通っています。共通の趣味である山登りにもチャレンジしていて、ついこの間も、二人で北アルプスに登ってきました。

◆支えてくれたお客様
今でも、店のお客様の顔が思い出されます。若い頃から40年間支えていただきました。一緒に歳を重ねてきたので、70代、80代の方もいらつしやいます。どこで暮らしていてもどうぞお元気でいてほしい。今はそれだけ祈っています。

◆今の暮らしを大切に
浪江のことは忘れられないし、浪江でしてきたことを変えたくないという気持ちはあります。ここでも家の前に畑をつくり、野菜や果樹を育てて食べていますし、味噌は今でも手作りです。また、浪江の友人や職場の仲間とも頻りに連絡をとり、楽しくおしゃべりしています。
ふるさと浪江への思いとともに、やはり今の暮らしを大切にしたいと考えています。ここで暮らすために、ご近所さんと積極的にふれあい、自治会活動にも参加するようにしています。新しいつながりを意識してつくる努力が必要だと思っております。

浪江のころ通信

●第65号●

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から5年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のころ通信／第65号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





今野美和子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：9月11日

浪江の思い出は毎日の活力



▲キャンドルナイト*が行われていた仮設住宅集会所前で

「知り合いの子どもに家庭教師をしたり、南相馬にある会社へ自分のペースで出勤する日々は充実」と話す今野さん。

避難という想像を超える体験で傷んだ心を救ってくれたのは音楽でした。キャンドルナイトのイベントで優しい音楽を聴きながら、浪江への想いを浪江で形にしたいという気持ちが生まれてきたと話してくださいました。

◆相馬に向かう旧道から見えないはずの海が見えました
勤務先の明光義塾で授業の準備を終え自宅に戻った時、地震は起こりました。長い長い揺れは部屋をめちゃくちゃにしました。やっとの思いで外に出て、自宅前の田んぼに身を伏せました。
「津波が浪江東中学校まで…」という放送は理解できるものではありませんでしたが、異様な雰囲気とにかく高台へと、父への伝言を玄関に貼り避難しました。車の中でラジオやエアコンを付けたり消したりしながら、夜遅く、その高台にある知人宅にお世話になりました。
翌朝、原発事故という更なる避難指示の放送が何度も流れていました。頭が混乱してすぐに

は動けず、町民の中でも最後の方の避難になったと思います。仕方なく津島に向かいましたが、その渋滞を見た時、咄嗟に相馬の父の実家へとハンドルを切りました。
その後ニュースを冷静に見ながら、母の知人もいる新潟へガソリンを求めに行きました。今後の方向を見極めていく時、3度目の水素爆発が起こり、もう戻れないと思い、最終手段である母の実家がある兵庫県たつの市へ向いました。祖父が亡くなった後、空き家として残っていた家を叔父たちが掃除をして迎えてくれました。ふと柱時計を見ると、針が2時46分を指していました。地震の影響はないはずなのに：祖父の「お帰り」というサインを感じました。

◆Love For Nipponのイベントに出会い、灯るキャンドルと音楽はいつも前向きにさせてくれます

たつの市には約3か月いました。兵庫県赤穂郡にある明光義塾上郡教室ですぐに仕事を再開し、浪江教室の生徒の安否確認もしました。悲しい別れを心に秘めながら働きました。もちろん、上郡の生徒たちは関西弁で元気いっぱい、福島から来た

*2011年、東日本大震災から毎月11日を月命日とし、仮設住宅などでイベントを開催しています。主催者はキャンドル・アーティストのCandle JUNE (キャンドルジュン)さん。「楽しいね、嬉しいね、おいしいね」をキャッチフレーズに、仮設住宅の方や子どもたちと遊んだり食事をしながら、想いをキャンドルカップに書いて、夜になったら音楽と共に灯し、大切な人たちを想うイベント。
「なみえチャンネル第23回」でも特集されています。YouTubeで検索してください。



今野 千代さん(下津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：9月7日

振り返ると、「この道を選んでよかった」とつくづく思います。これからは、患者さんと出来る限りお会いして、昔話がしたいです。

津島診療所の看護師だった今野さんは、震災直後の医療現場に立ち続け、救命救助に尽力なさいました。当時の様子をいろいろお聞きしましたが、一人も死者を出すものかと果敢に立ち向かった行動力と強靱な精神力に頭が下がります。

平成25年3月に退職され、今は福島市八木田在住。川俣町山木屋でトルコギキョウを栽培する妹さん夫婦を手伝ったり、以前お世話になった患者さん方を訪ねて話をしたり、手芸を楽しむなど、ご自分の時間を大切に過ごされています。



▲昭和47年に看護師となってから41年。浪江町津島診療所には39年間に亘って勤め、地域の人々を支え続けた今野さん。今がきつと、初めての長いお休みなのでしょうか。

◆津島最後の患者さんは消防車で搬送されたお爺さん。点滴と酸素吸入で一命を取り留めたんですよ
震災が起きたのは、津島診療所の午後の診療が始まって間もなくでした。激しい揺れに、医師や私たちが看護師、事務職員7人が、めいめいにカルテや薬の戸棚、機材などを押さえました。来院していた患者さんも、幸い怪我もなく無事でした。
私は、娘の無事を確認して定時まで勤務した後、一旦自宅に戻り、直ぐに津島支所へ向いました。避難所を探している方が15、6人おり、支所の和室で休んでいただきました。全員の食事をと、避難している女性たちと一緒ににおにぎりを握りました。支所のテレビで、沿岸部に津波が押し寄せ、大きな被害が出たことも知りませんでした。

夜遅くに自宅に戻り、翌早朝に支所に行く、診療所の前に長蛇の列。医師や職員に声をかけて開けました。町内から4、5人の先生方や津島在住の看護師5、6人が応援に駆け付けてくれて助かりました。ありがたかったですね。家族からおにぎりの差し入れがありました。
薬の処方、普段ならば数十人ですが、あの時は何百人にもなり、土日も開所して対応しましたが、通院患者さんの分の薬をお渡しすることは苦渋の決断でした。在庫が少なかった上に電話が通じない状況のなか、福島市の業者さんまで役場の職員さんが直接取りに行ってくださいなどの協力をいただきました。その後、安心して仕事をすることができました。
3月14日の夜中、実家の母や娘、妹家族など10人が二本松市針道の叔母の家に避難し、約1か月お世話になりました。私は翌日、所長と係長とで診察を終えた後、夕方に合流。13年間も共に働いた先生たちと今生の別れになるかと思うと、涙が止まりませんでした。
◆2011年9月、二本松市油井の運動場に、ようやく本格的な仮診療所が出来ました
3月16日、役場が二本松市東

和支所内に移転。避難所はどこも満杯で、体調を崩す人が増え、感染の危険がありました。そこで、町の仮設診療所開設が必要となり、整備が進められました。県からは、薬の手配に対する全面的な支援を受け、この頃から医療関係のボランティアも参加していただけるようになりました。娘や富岡町の特別老人ホームに勤めていた若者も手伝ってくれ、本当に心強かったです。また、花き栽培をしている義弟が、避難所の暖房にと営業用の灯油を援助してくれました。
4月半ば、町民の方々が二次避難所に移ると、診療所も岳温泉「あづま館」の一角に移転。私は勤務先に近いアパートに移り、休みも少し取れるようになりました。
そして、9月に開設した「浪江町国民健康保険仮設津島診療所」では胃力メラや血液検査もできるように、各仮設住宅と診療所を結ぶ巡回バスも運行。患者さんたちが楽に通院出来るようになったんですよ。
この家は未娘が探してくれ、7月に越して以来ずっと住んでいますが、膝と腰が悪い私には不便です。何とか住み慣れた福島市に落ち着きたいと考えています。

私を気遣ってくれました。ここのでずっと暮らすことも想像しましたが、故郷から1,000キロの遠すぎる距離に落ち着くことはできず、まずは現状を知ろうと岳温泉の2次避難所に入り、福島に戻ることを決めました。
こんな時でも仕事に恵まれていることや避難の不自さが少なかつたことへの罪悪感で誰にも言えない負担がありました。でも、毎月11日に仮設住宅で行われるキャンドルナイトにはどんな状況の人も公平に居られる時間がありました。そこで優しい音楽と過ごしながら、パッと夢が浮かびました：浪江のシンボル、サンプラザ近くで待っていてくれる家があります。母は笑顔で溢れるお店をしています。いつかそこで皆が立ち寄れて音楽が溢れる：そんな場所を作りたいです。



山田 秀男さん(井手)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉
取材日：9月17日

浪江への思いに揺れながら、新しい暮らしへ



▲若い頃は手仕事が好きだった山田さん。刺繍で作った観音像の前で。

前は平成27年6月号に掲載された山田さん。体の不自由だった奥さんと共に避難をした話をいただきました。

今回は、いわき市に住む今の暮らしと将来への決断、そして忘れられない浪江への思いについて伺いました。

◆一人暮らし
いわき市のこの家に引っ越してから、家内が転倒して骨折し、長期入院をしました。その後も、専門的な介護が必要となり、今は施設に入所しています。それから一人暮らしになり、話し相手のいない生活をしています。家内が居ればケンカしながらでも会話ができたのですが(笑)。
朝起きて午前中はずっと新聞を読んで、午後から運動不足にならないように散歩やダンベル体操をします。ひと風呂浴びて、晩酌をして就寝。一日が長

いのか短いのか、そんな日々の繰り返しですね。
なみえ絆いわき会(いわき市在住の浪江町民による自治組織)の定例会や、料理教室、体操のイベントには率先して参加しています。ここは浪江と違って近所づきあいもないので、親族以外の人と話をするのは、その時だけかもしれないですね。
◆浪江に帰りたいが
東京で生活していた5年間を除いて、ずっと浪江の井手地区で暮らしました。世帯数約100戸の小さな地区で区長など役員をずっと続けてきたので、ほとんどが顔見知りでしたね。
井手地区は帰還困難区域になったので、家に戻るのにはあきらめました。町内のどこかには住みたいと思っていました。
なぜ浪江に帰りたいのかと自問自答したけれど、自然が豊かだからとか、人づきあいがあるからというだけでなくて、それら全部をひっくるめた「空気」のようなものが他の町とは違うんですね。
しかし、いろいろ悩んだ末、

◆ずっと浪江とつながっていた
でも、浪江とはどこかでつながっていたかと思えます。住民票も移したくないんです。それは高速料金や税金の減免を受けられるからという理由ではありません。この間、運転免許の更新をしたら、住所に「浪江町井手」と書いてありました。これを見るとね、心底ほっとするんです。
みんながどこで、どんな暮らしをしているかを知りたくて、こころ通信を読むのが、今の楽しみです。浪江とつながっている実感が持てるので、いつまでも続けてほしいと願っています。



豊田 伸一さん・孝子さん・美都女さん・将伸さん(権現堂)

取材者：一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム 大泉
取材日：9月29日

ヘアサロンにお茶を飲みに来てください

昭和28年に豊田美都女さんが開業した「ヘアサロン美都女」。長年、地元の理容室として親しまれてきました。息子の伸一さん・孝子さんご夫妻、そして孫の将伸さんの三代にわたる理容師一家です。浪江のお客様に支えられて、心機一転、郡山市にヘアサロンをオープンします。



▲新しいお店で。右から、伸一さん、孝子さん、美都女さん、将伸さん。



◀ゆっくりおしゃべりできるコーナーも。

◆浪江のお客様がくつろげる場所
伸一さん 埼玉に1年間避難した後、郡山市に移ってきました。埼玉にいた頃から浪江の常連さんが訪ねてきてくれて、本当にありがたかったですね。こちらに来てからも、県内外から時間をかけて多くのお客様にお越しただいておられます。
美都女さん 浪江の店には赤ちゃんからお年寄りまで来てくれたから、みんな家族みたいだったね。

◆家族の思いを一つに再出発
孝子さん 昔のような気持ちになれず不安もありましたが、いい場所に巡り会って、ここなら大丈夫と思えました。
将伸さん 僕は、東京で理容師の修行をし、浪江に戻ってから1年で震災に遭いました。地元で生きていこうと歩み始めた矢先だったので、ショックは大きかったです。いつ何があるかわからないからこそ、これからは自分らしい生き方を探したいと

伸一さん 皆さん、うちにいらしていろいろな話をしたいかれます。百人百様の悩みを背負っているのだから、安心して話ができる場所でありたいですね。
孝子さん 私達を信頼して下さっているのだから、心を開いて話をしたいと思っています。
伸一さん それで、浪江の人がおしゃべりをして心からくつろげるヘアサロンを再開しようと思いたったのです。正直、この年齢になって、なじみのない土地で再開するのは、勇気が必要でした。でも、何の挑戦もしないで、このまま人生が終わっていいのかわ、後悔したくないと思っただけです。

◆お茶を飲んで話をしましょう
孝子さん ていねいな仕事をし、ゆっくりおしゃべりができる癒しのヘアサロンです。
伸一さん 時間をかけて遠くからいらつしやるお客さんに喜んでもらえるように、お洒落なサロンを目指しました。お茶を飲みながらおしゃべりできるコーナーもつくっています。予約制にしましたので、まずはお電話を。一度足を運んでください。家族でお待ちしています。

hair salon mitome
11月7日オープン
郡山市富久山町八山田字三宝垣31-24
(洋服の青山八山田店・極楽湯郡山店近く)
TEL 024(954)5160

思っています。父親の決断を応援していますよ。父親と人生や仕事について議論をするようになったのも、震災以降ですかね(笑)。
美都女さん 仕事があって、家族一緒なのが何より幸せだね。